

## 敗戦後50年を迎えるにあたっての正義と平和の実現に関する声明

私たちは、わが国の敗戦50年という歴史の節目を迎えるにあたり、国と教会の戦中戦後の歩みを改めて顧み、また将来の方向を展望しながら、神と隣人の前でイエス・キリストにあって、私たちの立場と決意を表明する。神は、イエス・キリストの十字架と復活において、私たちをご自身と和解させて下さった。神と人間の和解の福音は人と人、人と自然の間に正義と平和を実現することを通して具体的にこの世に証しされる。私たちはキリストが「平和をつくりだす人たちは、幸いである」という祝福をもって、私たちをこの世に派遣して下さったことを覚えて、この正義と平和の実現に尽力したいと願う。

私たちには、主イエスから託され、担うべき次の課題が与えられている。

### 1．キリストの福音は私たちを罪責告白と悔い改めへと促し、和解へと導く。

『時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。』マルコ1・15

私たちは敗戦にあたり、罪責をどこまで自らの課題として認識することができたであろうか。私たちは戦後の出発に際しアジア諸国の人々への謝罪と補償を行うことができなかった。これは戦争責任の認識不足によるものであった。この時期に結成された私たちの連盟は、この罪責を十分に自らの課題とすることができなかった。罪責の告白こそ敗戦後に生きる私たちが常に立ち返るべき原点である。

### 2．キリストの福音は私たちをすべての呪縛から解き放つ。

『自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない。』ガラテヤ5・1

私たちは、戦前の天皇制国家体制がもたらした全体主義の過ちと侵略の歴史について繰り返し論議を行ってきた。しかし、象徴天皇制が有する問題については、どれだけ検証してきたであろうか。戦前戦後を貫いて天皇制は統合機能として役割を果たしてきたのである。解放の福音に生かされる私たちは、このことから自由であったであろうか。「敗戦後」を生きる私たちは、天皇制が持つ統合の宗教性と私たちの信仰・教会の在り方を常に吟味しなければならない。

### 3．キリストの福音は、私たちをキリストのからだである教会へ招くことによって、同時に私たちをすべての場における「共生」へと導く。

『一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。』

## 第1コリント12・26～27（新共同訳）

敗戦後のわが国は「奇跡」と自負する経済発展を遂げた。しかしこれはアジアの人々に対する更なる「むさぼり」の結果にほかならなかった。私たちはこのむさぼりの富の中で安易な幸福主義に陥り、隣人を見失ってきた。その中で、被造物としての自然をもむさぼり、破壊した。

敗戦後の私たちの教会形成は、この経済発展の中で進められてきた。私たちはアジアの隣人たち、および、被造物である自然と共に生きてきたであろうか。キリストの体である私たちの教会は共に苦しみ、共に喜んできたであろうか。会衆主義に立つ私たちバプテスト教会は、隣人とそして自然との関係においても体のすべての部分を等しく尊ばなければならない。

**4．キリストの福音は私たちに先立って世界の中で語られている。主のことばは私たちを和解の福音の証しへと押し出す。**

**『イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう』マルコ16・7**

私たちは教会の保持を名目に、戦争に反対せず、戦時体制を担った。私たちは、天皇崇拜の容認とキリスト信仰が両立しうるかのごとく考え、過ちを犯した。この二元化の克服こそ、敗戦後の福音宣教を担う私たちの課題である。教会と世界、私と隣人を分離して捉えるとき、私たちは和解の福音より遠ざかっていく。主のことばは私たちの「へだての中垣」(エペソ2・14)を取り除く和解の福音である。復活の主は私たちに先立って世界の中で語り、働いておられる。主は教会の中だけにおられるのではない。私たちは主のことばを世界の中で世界の人々と共に聴く。そしてこの和解の福音を宣べ伝えていく。

私たちは敗戦後50年に際し、ここに再び罪責を告白し、神のあわれみと赦しを求める。しかし同時に、そのような私たちのうちに「良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信して」(ピリピ1・6)喜び、感謝する。

私たちは、終りの日の完成を待ち望みながら、和解の福音を生き、証しし続けるように求められている。私たちは全日本、さらには全世界に和解の主イエス・キリストを証しする目的をもって連盟を結成している。「自立と協力」は連盟存立の内実を問うものであり、同時に世界がそのようなかたちで一つとされることの希望を表している。私たちはその希望を抱き、今、新しくされて歩みだす。

「『しかし、私はすぐに来る』。 アアメン、主イエスよ、来たりませ」  
ヨハネ黙示録 22・20

1994年11月18日  
日本バプテスト連盟第45回定期総会